



ピアノニストからみた室内楽入門

第5回 ブラームス…ピアノ三重奏曲第1番

深井尚子●ピアニスト

ピアノと弦楽器の特徴や音域を理解したうえで、今月はいよいよ実際の楽曲を例にアンサンブルの楽しさをお話しします。今回は、ブラームス（1833～1897）のピアノ三重奏曲第1番です。ブラームスは、ピアノ三重奏曲を3作曲しました

が、この曲はその第1番目の作品です。1854年、ブラームスが21歳の時に作曲されましたが、熟考を重ねて作品を仕上げるタイプのブラームスは、1891年、51歳の時にこの曲を改定し、若き情熱だけではない、晩年の内省的な奥深さを持った内容になりました。現在は、ほとんどがこの1891年改訂版で演奏されています。また、後期ロマン派では、古典派のピアノ三重奏曲のような、ピアノが中心で弦楽器が添え物のように扱われることはなくなり、弦楽器とピアノが、同等の役割を持

つ、まさにアンサンブル曲となっています。ブラームスの生きた時代は、ピアノも現在とほぼ同じ状態に改善されており、当時と現代の音量や音域の差を熟考しなくてもいい楽曲だと思います。

この曲は、弦楽器奏者が好む曲で、ブラームスが弦楽器の特徴を熟知していることがよくわかる曲と言えます。ピアニストにとつては、室内楽曲に限らず独奏曲にも見られる、ブラームス特有の音域の広さ、和声の重厚さ、地味でありながらも内声に表れる重要なメロディーなど、技術的にも音楽的にも難しい曲と言えます。

譜例をご覧ください。この部分は、ピアノが第1主題をfで右手のオクターブによって奏でられています。それに対して、ヴァイオリンは、三連符のモチーフを、チェロは、ピアノの第1主題のメロディーに沿う



Shoko Fukai

ウィーン市立音楽院修了。ウィーン古典派をレパートリーの中心に演奏活動中。特にベートーヴェンを深く研究しており、学術論文多数。ベートーヴェンピアノ・ソナタのCD第1集、第2集は好評発売中。色とりどりの小品集ハイドン、ベートーヴェン（ヤマハミュージックメディア）の校訂解説の楽譜も好評。現在、北海道教育大学音楽コース准教授。

ように長4度下を奏でます。その後は調性を変えながら、チェロも、ヴァイオリンも楽器がよく鳴る音域で盛り上がるように音楽が進みます。ここは、ブラームスの作曲法ですばらしさと人の気持ちを引き付ける興奮が3つの楽器すべてによって如何なく発揮されている部分です。この時、ピアニストは、メロディーを遠慮することなく豊かな音質で奏でているのですが、チェロがそのメロディーに沿っていることを忘れてはいけません。また、左手の3連符が、ヴァイオリンと掛け合っていることも意識しなければなりません。この数小節は、ピアノにメロディーをゆだねつつ、伴奏部分は、あまり和音を厚くせず、モチーフとオクターブで書かれていることにブラームスのアンサンブルへの思いが感じられます。